

## ③ 原始・古代の学習でのワンポイント活用例 ～資料を実物大にして比較する～

富山県立南砺福光高等学校教諭 吉田 英文(よしだ ひでふみ)

### ◆単元名：第2章 原始・古代の日本と世界

「縄文 VS 弥生」(⑤日本列島のあけぼの + ⑥楽浪の海中に倭人あり)(教科書 pp.24-27)

### ◆本時の目標：

縄文時代と弥生時代を、①経済、②文化、③自然との関係、④階級、⑤戦争、⑥人口・寿命などの観点から比較し「どちらの時代が優れているか」という切り口で考えさせる。その際、抽象的な議論にならないよう、教科書その他に掲載されている資料などを活用し、根拠に基づいて表現する力も身につけさせたい。

### 《本時の展開例》

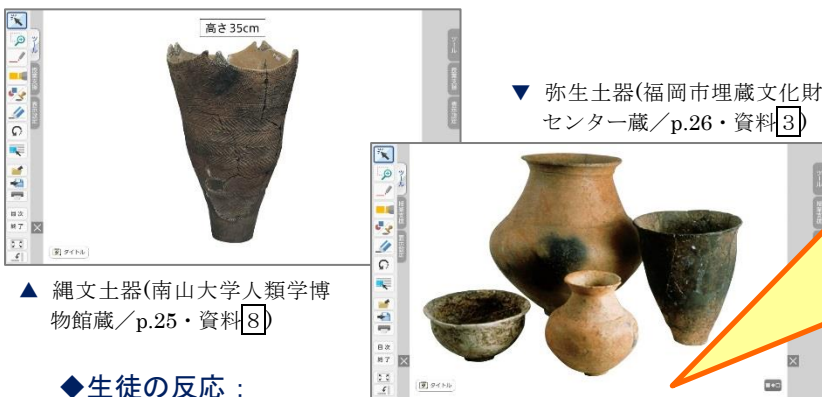
	学習活動	留意点	デジタル教科書・教材
導入 (5分)	●「時間の経過につれて社会は発展しているのか」、「縄文時代の方が優れているのではないか」などと問いかけながら、縄文と弥生を比較させる。	・「縄文時代より弥生時代の方が発展していてよい」と素朴な考えをもっている生徒が多いので、あえて縄文時代のよさを指摘するような形で問題提起をする。	・国立科学博物館図録『縄文 VS 弥生』(2005年) ・フリーペーパー『縄文 ZINE』など
展開 (35分)	●まず土器に着目して比較する。芸術性の高い縄文土器(岡本太郎さんが高く評価)と、実用性の高い弥生土器。次に大きさへと視点を変える。  ●なぜ縄文土器は大きくて、弥生土器は小さいのだろう。  ●その他の視点でも比較し、考察してみよう。	・土器の形という視覚的にわかりやすいところを導入にして、次にその大きさに注目させる。教科書には縮小された写真が掲載されているため、実際の大きさはどのくらいだろう、と問いかける。  ・土器の大きさの違いを生徒に予想させ、稲作の開始や格差の発生などと結びつけて理解させる。	・デジタル教科書(p.25・資料[8], p.26・資料[3])〈プロジェクトでスクリーンに映す。〉  ・縄文土器(p.25)や弥生土器(p.26)の画像を、スクリーン上で実物大に拡大する。一人の生徒にパソコンで拡大の操作をさせ、もう一人の生徒が定規を持ってスクリーンに映った土器の大きさを測る。 *並置表示にすると画面に二つの資料を映せる。
まとめ (10分)	●次回以降、図書館を活用し、縄文時代と弥生時代のどちらが優れているかの調査をすることを伝える。	・「ふりかえりシート」に授業の感想と、次回の調べ学習・レポート作成にむけての自身の見解を記入させる。	・レポートの評価基準を提示する。[斎藤(2016)を参照。]

### ◆指導にあたって：

○縄文時代や弥生時代は遠い昔のことと感じやすいが、その二つを比較することで、最終的には現代社会を見つめなおす学習としたい。弥生時代には稲作が始まり、食べ物が貯蔵可能となり、平均寿命も延びたが、人々の間に格差が発生し、食糧をめぐる争いも発生した。戦争は人為的な死や男女の差別も生む。戦争のある弥生と戦争のない縄文であれば、どちらが幸福か。また、自然を尊重していた縄文に比べ、弥生の稲作は自然への挑戦でもある。これは現代が直面する環境問題とも重なる。環境問題が未解決な現代よりも、自然と共存する縄文のほうが優れているところもあるかもしれない。社会には「時間が進めば進歩する」と単純に言えない面もあることに気づかされる。一方、このような抽象的なものの見方を提示するだけでは歴史学習として不十分である。土器などの具体的な資料と結びつけることも忘れないようにしたい。

### ◆デジタル教科書活用のねらい：

やはりデジタル教科書を活用することで、印刷物の資料ではできないことを取り入れたい。今回の授業では土器を実際の大きさに拡大する活動を通して、縄文と弥生の土器の大きさの違いを実感させたい。ともに教科書には縮小したものが掲載され、同程度の大きさと勘違いしやすい。このような活動を通して、この後も教科書に掲載されている資料の実寸に注意が向くと感じている。



- ① 資料提示：資料をクリックして拡大
- ② ツールタブ → 範囲拡大：  
スクリーン上で実物の大きさとなるように、調整しながら拡大する。  
※もう一人の生徒は、定規を使って、スクリーン上の土器が実物大になっているか確認する。

### ◆生徒の反応：

○縄文土器よりも弥生土器のほうが大きいというイメージを持っていたようで、資料を実物大で表示した際に、意外だという反応があった。

#### 生徒の声

- ・弥生土器のほうが薄くて機能性はあるけど、縄文の火焰土器などと比べると面白みがないと感じた。
- ・家族そろってご飯を食べることが減る現在、縄文時代のみんなで食べるという話に考えさせられた。

### ◆授業を終えての感想・今後の課題：

○オオツノシカなども実際のサイズはかなり大きい(野尻湖ナウマンゾウ博物館)。地面から頭までの高さ(角を除く)は、教室の天井をこえる大きさがある。このように教科書に掲載されている資料の実寸に、生徒が今後も注意をむけてくれると、より実感を伴って歴史を理解することができるようになるのではないかと思う。

#### 【参考資料】

斎藤有吾「パフォーマンス評価における項目反応理論を利用したアカデミック・ライティング力の測定」、『京都大学大学院教育学研究科紀要 第62号』京都大学大学院教育学研究科、2016年  
成田喜一郎『中学校社会科授業ディベートの理論と方法』明治図書出版、1997年